兒童心理學（第十二講）

牛島義友

習癖其他

神經質的習癖　子供には色々な癖がある、指を吸つたり、爪を嚙んだり色々な癖がある。斯かる體の或部分をいぢる癖は普通考へられる如く神經質の子供にのみ現れるものではなく、殆んど凡ての子供に現れてゐる。オルソンは一年から六年までの四六七名の子供に就いて調べたところ、唯一人の子供だけが無いだけで他の子供には何等かの癖が見られた。其種類を數へてみると次の樣なものがある。

1、口に關したもの　指を吸ふ、爪をかむ、舌を出す。
2　鼻　鼻をほじくる、搔く、皺をよせる。
3、手　指をかく、手を捩じる、拳を握ぎる。
4、毛髮　髮をいぢつたり、編む、頭を搔く。
5、耳　耳をいぢつたり、ほじくる。
6、刺戟的　體を搔く。
7、眼　目をこする、まばたきする。
8、性器　性器をいぢる、股をこする。
9、顏　顏をしかめる、顏筋をぴくぴく動かす。

以上の樣な樣々な癖が見られるが、其現れる割合は次の如くなる。

口に關するもの	五四%
鼻に關するもの	二八%
毛髮に關するもの	二三%
目に關するもの	一五%
耳に關するもの	一〇%
性器に關するもの	四%

尙ほ斯かる數は年をこると減少する譯でなく、又女兒の方が男兒より多い。斯かる原因としては親の素質、模倣、疲勞、榮養狀態等が考へられると言つてゐる。以上の中主な癖二三について詳しく述べよう。

指を吸ふ癖　乳兒が指を吸ふのは一般現象で、生理的な

ものであると言ふ人もある。併し之は乳をのませる遣り方とも關係する。乳をのむ前は子供は空腹のため緊張してゐるが、のむ事によつて弛緩し、充分のんでしまふとすつかり弛緩して眠つてしまふ譯である。併し體の調子や感情狀態や牛乳の狀態が惡くて、腹一ぱいのまなかつた場合には指を吸ふ樣になる。これは眠つた後でも尙ほ吸ひ續ける事がある。斯かる經驗が重なると遂に習癖になつてしまふ譯である。斯かる習癖が出來るのは、親の態度やこれを矯正しようとして指を口から離したり、色々な矯正器を使用するだけしかやらないで、其奥にある榮養的原因を無視する事に起因すると言はれる。

斯かる癖は豫防する事が先づ必要であるが、之は榮養狀態と關係が深いから、先づ食餌の質と量とを適當にする必要がある。若し癖が出來てしまつたら、年少幼兒の場合は靜かに指を口から離すとか、子供に何か握るものを與へる樣な單純な方法がよい。器具を用ひたり、胡椒をつけたりするのは子供が大きくなつて自分でも矯正しようとの態度になつてからの方がよい。唯罰として斯かる方法を用ふるのはよくない。年長幼兒の場合は更に矯正に努力しなければならないが、この場合若しこの癖がもつと一般的な困つた性格の一徵候である場合には、一般的生活を改める事によつて直る。例へば或五歲の子供は何時も母親とばかり遊んでをり、玩具等が充分あるにも拘らず指を吸つてゐた。ところが適當な友達と遊ぶ樣になつて子供の生活態度が改善してからはこの癖は無くなつた。又年長兒の場合は子供の誇りに訴へて、自ら進んで矯す樣な態度をとらせ、指を吸はなかつた日には褒美をやつたり、日課表に成功のしるしをつけさせたりするのがよい。

爪を嚙む癖　之は指を吸ふ子よりも活動的な、落付かぬ子供に見られる。之は三歲以後から現れ學童には三割位見られる。この癖は智能や身體狀態と關係はなく、又手淫等の困つた行動と結付く譯でもない。又神經質な子供と限つた譯でもない。强ひて言へば家庭內に何か緊張的な空氣がある場合に起る。故に之を矯正するには其緊張を解き、子供を健全な性格のものにする事が第一である。

癇癪　子供はよく怒つて癇癪を起す。少い子供で一日に平均〇・一三回、多い子供は三・六三回起すと報告されてゐる。この癇癪は母親を困らせると見えて、教養相談に來る者の三割位はこの點を訴へてゐる。

癇癪はどの年齡の子供にも見られるが、大體年齡と共に減じてゐる。滿三、四歲頃が一番激しいとも言はれる。又智能の低い程多くなつてをるとも言はれる。

癇癪の起る直接の原因は子供の活動や計畫が妨げられたり、妨げられたと思ふ事によつて起る。併し之は表面の原

因で、更に深い原因は家庭の躾や教育態度に在る。即ち子供が癇癪を起した時の取扱ひと、悪い手本を教へるものがある事が原因である。

子供の無理な要求を通して其欲望を満してやると、やがて子供は要求を満したり、親の注意を惹く手段として一々怒つてみせる樣になる。從つて不當な要求や、誤つた要求の仕方の場合は無視したり、他の遊びをさせたり、一人で放置してをくとよい。

次に怒りぽい、興奮性の父親や神經質のいら〳〵した母親、或は酒癖の悪い父等は子供に癇癪の手本を教へる者である。又子供が遊んでゐる時に考へなしに親が中止させたり、妨げたりする事が重なると子供は癇癪持ちになる事もある。要するに親の斯かる態度が癇癪の主な原因である。

又子供が風邪をひいたり、空腹や、疲勞してをる時は怒り易いし、身體的異常が原因になる事もある。斯かる場合は先づ其身體的狀態を改善してやる事が第一である。

虛言　故意に僞を言ふのが大人の虛言であるが、子供の虛言には色々な性質のものがある。バートは次の樣な種類をあげてゐる。

1、遊戯的虛言　幼兒の空想的話しから生じるもの。

2、混亂的虛言　子供が充分知らない事について說明を求められたり、色々と質問を投げかけられて混亂した話をしてしまふもの。

3、虛榮的虛言　他人の注意を自分に惹かうとして虛構の話をするもの。

4、復讐的虛言　にくしみや復讐の武器として虛言を言ふもの。

5、言ひ譯の虛言　禁じられた事を犯した場合の言ひ譯。

6、利己的虛言　他人をだまして味を占めようとする惡意のもの。

7、利己的虛言　他人をかばはんとして虛言を言ふもの。

8、社會的虛言　大人が社會生活をなすに當り、便宜上使ふ虛言。

從つて初めの三つや最後のもの等は眞の虛言ではないから敢て問題にする必要はない譯である。併し親等は其區別が充分出來なくて、小さいくせにもう虛言を言ふ樣になつたと言つて心配する事が多い。

教育相談に來る大部分の者はこの點を訴へてゐる。この虛言の傾向は四、五歲頃から始まり、九歲頃が最も多く、其後は減ずる。尤も女の場合は十七歲頃まで增加すると言はれる。又十二歲頃までは智能の高い者程虛言を多く言ふ傾向がある。それ以上の年齡に於ては智能と虛言とは關係

はない。

斯かる虚言を直すには、虚言自身よりも先づ其理由を見出す樣に努力しなければいけない。このためには事實をまづつきとめなければならない。一人だけの言ふ事でなく數人の言葉から事實を確定する事も必要である。斯かる虚言のなされた前後の事情を確めた後に、子供自身の言ひ分を聞く。この場合虚言を非難し責める態度をとつてはいけない。非難はもう既に充分行はれてゐるから、最もよい方法は自ら子供の水準に降つて行つて、親切に熱心に子供の困難としてゐる事柄について話してやる事である。既知の知識に基いて何故子供が虚言を言はねばならなかつたかを調べる。この事が分つたら、次に子供の誤つた考へ方や、親の態度や環境の好ましくない點を改める事に努力して行く。彼の劣等感や不安感を克服さしてやり、虚言を言ふ必要がない樣にしてやるのが最も賢明な方法である。

以上の習癖や其他前回に取扱つた困つた問題を通じて注意す可き事は、斯かる困つた問題は子供の病氣であると考へ、其原因が身體的なものに在りはせぬかと考へる傾向が強い事である。遺尿をすれば生理的な故障があるのでないか、癇癪持の子は神經質で、小兒精神病になりはせぬかと直ぐ心配する。問題が六ヶ敷くなり、教育に手こずると直ぐ身體的な病氣や缺陷のせいにしようとする傾がある。勿論身體的なものが原因になつてゐる場合もあるが、多くの場合は親自身の中に、其子供に對する教育態度の中に原因がある事に氣付かねばならない。燈臺下暗しと言ふが、親自身には自分の遣り方の缺陷や、自分の家庭環境については案外に氣が付かないでゐるものである。

子供の不良化と言ふ場合にも、生れ乍らにして不良な子供が居る譯ではない。不良化の恐れのある素質を持つた者はゐよう。併し斯かる子供が凡て不良になる譯ではなく、これに環境的、後天的惡原因が加つた場合に不良化するのである。不良化の原因の一半は環境的なもの、即ち家庭の雰圍氣、教育態度、夫婦關係、友人關係等にある譯である。故に斯かる生活環境に注意を拂ふ事が必要である。

一般に親は自分の家庭や教育態度には自覺せず、自分達の遣り方でよいのだと自己辯護する傾向がある。第三者から見れば明瞭に分る缺陷も自身には氣付かないものである。斯かる故に多くの家庭の遣り方を見てをる保姆なり、教育相談にたずさはる人々の意見を聞いたり、指示を受けて、自分の家庭の缺陷や短所を自覺し、それの改善や除去に努める事が必要である。（了）